M．ユルスナールの創作原理と初期作品-『キマイラの庭』から『アレクシス』まで-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 真太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16691

２０１３年度　文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

Ｍ．ユルスナールの創作原理と初期作品

―『キマイラの庭』から『アレクシス』まで

学位請求者　仏文学専攻
森真太郎

内　容　の　要　旨

１．本研究の問題意識と目的

マルグリット･ユルスナールの初期に書かれた二作品、『キマイラの庭』(1921)と『アレクシスあるいは空しい戦い』（1929）を読み解き、そこから浮かび上がる作者の文学創造における根本概念である「声」への意識を、作者の世界観あるいは思想と合わせて検討することで、技法と思想が渾然となった作家の核を摑むことが、この論文の目的である。この目的が生じたのは以下の理由による。ユルスナールの処女作は研究者からも作家本人からも『アレクシスあるいは空しい戦い』と見なされるが、それ以前のまとまった作品として『キマイラの庭』がある。この作品は作者から絶版にされたこともあって論及されることが少なく、ユルスナールの作品を網羅的に扱ったジュリアンの研究(*Marguerite Yourcenar ou la signature de l'arbre*, PUF, 2002)においても、分析を『アレクシスあるいは空しい戦い』から開始し『キマイラの庭』は等閑に付されている。だが『キマイラの庭』を読解すれば解るように、若書きとはいえ明確なテーマと周到な構成を持つこの作品はユルスナールの作品論を考える上で重要な資料であると思われ、作者自身の批評や回想も複数見当たる。作者の処女作『アレクシスあるいは空しい戦い』はユルスナールの声の手法、事物観や世界観の問題などその後の作品の重要な要素をすべて孕んだ作品となっているが、さらに『キマイラの庭』の読解を加えてこそより正確なユルスナール文学の理解が可能となるのではないか。本論文の問題意識はこのようなものである。

本論文が作家のその後の創作活動の核になる要素を捉えようとする以上、この中心部の理解については、著作や発言を時代にかかわらず読み解く作業が必要になるのはいうまでもない。ユルスナールの創造における「化身」métansomatose の体験、それと関わる「私」の捉え方、そしてその世界観の根底をなす、事物（現実）への思想など、思考のそうした重要な諸要素が一体となって、ユルスナールにおける「声」の概念が形づくられている。その確認の上で、ユルスナールという作家の核を最初期の作品にまで遡って検討した。

2.　本研究の構成ならびに各部の要約

第一部：形成と最初期の著作活動

第一章ではまず初期作品に至るまでの略伝を伝記研究や作者の著書を参照しつつまとめ、作者の形成において重要と思われる諸要素を検討した。作者の幼少期の特異な養育環境と後に本論文の研究対象の『アレクシス』も含め、いくつかの作品にテーマを提供する父親、そしてジャンヌ・ド・ヴィタンゴフとその夫の関係、さらにヨーロッパ遍歴とその特異な人文主義的な教養の形成を振り返っている。初期のヴィタンゴフに捧げた詩からはすでに対象と交わり「声」を得るという姿勢が読み取られるなど、後年確立される創作姿勢との関わりを強調している。

第二章においては最初の出版作品である『キマイラの庭』が考察の対象となる。ここでは当時十九歳の作者がこの作品に与えている、キマイラ（危険）と森（安全）、キマイラ（狂熱）とアフロディテ（愛・生殖）、そして主要登場人物であるイカロス（若さ・情熱）とダイダロス

（老年・叡智）などの対立項を浮き彫りにしている。これらの考察から浮かび上がる第一の点として、まず『キマイラの庭』に現れる主要登場人物、イカロスとダイダロスが後年のユルスナール作品に出てくる主要人物の原型とみなされるということである。作者が後年になって親近感を吐露していたダイダロスは『黒の過程』のゼノンに重なり、一方で迷宮を脱出する情念の肯定者イカロスは、家庭を棄て自分の性向と藝術を選択するアレクシスに重なる。第二の重要な着目点として、後年ユルスナールが初めて「声の肖像」を描いたと述べたのは『キマイラの庭』の第一幕第五場の死に瀕したダイダロスの独白である。『アレクシス』では死に接近した病の時に物語が展開される重要な声が生まれ、『ハドリアヌス帝の回想』では老いて死を意識した皇帝から語りが生まれるが、この特徴は『キマイラの庭』に早くも認められる。

第二部：ユルスナールの創作観

アウエルバッハの『ミメーシス』では二十世紀初頭の状況は人文主義的教養が崩壊した時代とされるが、ユルスナールも『アレクシス』と同年の「ヨーロッパ診断」（1929）というエッセーにおいて同様の時代認識を表明している。その崩壊の時代で彼女が信じ得た思想とは何であったかをこの第二部で本人の発言を通じて考察した。

第一章は「フローベールと「化身」の創作観」を検討する。若いころからフローベールの書簡集を読んでいたユルスナールが大作『ハドリアヌス帝の回想』の着想をそこで得たことは知られているが、創作のための姿勢においてもフローベールから多くを学んでいる。ユルスナールが読み取るのは作中人物を客観的に創造するための「化身」の創作姿勢である。小説家は「化身」métansomatose という言葉で表される努力により他者を創造する。だが、ユルスナールにとって、この「化身」の行為とは、自らをそのまま登場人物に投影するのではなく、自らの経験や感情を差違化されない「実体」という純粋物に化し、共有可能なものに濾過したうえで、他者創造に生かすことを指す。そこで必要とされるのは自己放棄であった。その意味でユルスナールはフローベールが言ったとされる「ボヴァリー夫人は私だ」という言葉も、トルストイが『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンに自己を投影したことも肯定しない。

第二章「現実と幻想（レアリテ　ル・ファンタスティック）」において、ユルスナールの世界観における現実や事物の重要性を探る。シャルル・デュ・ボス宛の手紙では「諸現実」は宗教に代わるほど重みがあると作者は述べている。この現実との交わりが創造の母体となる。この視点はユルスナールに対しての影響が批評家から指摘された同時代の文学者リルケとジッドが抱いていた考えと結びつく。『マルテの手記』に影響を受けたユルスナールはリルケの事物への敬虔な態度に強い共感を表明し、『アレクシス』の主人公にもこの特徴が与えられた。だが一方で『地の糧』の作者ジッドには先駆者としての役割は認めつつも、事物への態度を深化させなかった不満を洩らす。ユルスナールとリルケの共通性はさらに、対象を受肉する姿勢がもはや現実と幻視との境目が消え失せるまで深いものであるという点でも共通性を持っていた。

第三部：『アレクシスあるいは空しい戦い』と「声の肖像」

第一章「『アレクシスあるいは空しい戦い』における構成と主題」では、この作品に与えられた周到な構成を「啓示」の場面をもとに分析する。第一の啓示においては、音楽との根源的な出逢いが、第二の啓示においては、病床における自分の肉体の決定的な発見が、第三の啓示においては音楽および肉体が結びついた藝術の選択、つまり家庭を捨てて己の性向に忠実に生きるという自己との契約が語られている。本作を「形成の物語」と称する批評家もいるが、これらの啓示はその形成を跡付ける場面として配置されている。

この全体の構成を押さえたあと、『アレクシス』の主要なテーマである霊と肉の問題を扱っている。アレクシスには作者の表現に従えば「禁じられた性向」つまり同性愛者としての特徴が与えられている。重要になるのは初の性愛体験と思しきジプシーの少年との出逢いが美との出逢い、事物のなかに拡散していく感受性の芽生えとして描かれることである。彼はここで無垢な体験、世界との一体感を味わう。だが、すぐさま社会的倫理観が彼を罪悪感の中に陥れる。ここに「空しい戦い」が始まるが、主人公はその深刻な苦悶や、自らに課す厳しい禁欲の末に死に瀕する病を通じて肉体のもつ崇高な価値に気付く。それは肉体が多様な事物とのコンタクトを可能にしているということである。音楽家である彼にとって音楽とは宇宙の魂とされ、その魂に触れるために世界と交わらなければならない。自分の性向を押し殺していた彼は自分の藝術家としての資質まで殺すことになることに気付く。結婚して子どもが生まれたのち、自分自身の手という肉体を再発見することでこの反省が再び行われ、ついに妻と子どもを棄て去る決意をする。

こうした物語の進行で示されるのは、彼が精神よりも肉体を通じた事物や外界との接触を重要視していく過程

にほかならない。これは、第二部で確認した作者ユルスナールの創作原理、すなわち事物と現実（レアリテ）との交わりに信を置く思想と密接に結びついている。また第一部で確認したイカロスとダイダロスの物語がアレクシスに継承されていることも意味する。『キマイラの庭』で脱出する者として描かれたイカロスは家庭と慣習を脱出するアレクシスの姿勢と重なる。だが『アレクシス』で演じられた劇はまた老人ダイダロスがキマイラという幻想と演じる戦いの劇を継承している。

第二章「『アレクシスあるいは空しい戦い』の表現」においてはまず、ユルスナールが『アレクシス』で選択した表現を、「物語（レシ）」という観点で考察する。批評家からも作者からも代表的なレシとして類似性を指摘されたＢ．コンスタンの『アドルフ』と『アレクシス』を比較し、語り手の権限、対象との距離などの点で、両者の隔たりを明らかにしている。

次に、ユルスナール文学において「声」という考えが特権的な地位を占めていることを踏まえ、「声」を表現するための彼女の文章観を考察した。とくにユルスナールの詩と散文についての言及を考察し、リズムや音声によって支えられている詩にたいして、「散文は大海原」だと表現される散文の特殊性、散文のポエジーを創出する手段としての「声」への拘りに注目している。作家は十九世紀まで、「声」の自発性、論理的なほころびや曲折がほとんど表現されてこなかったとする一方で、過去のいろいろな作家や芸術家の文章に「声」をみいだしている。

その声を生かした『アレクシス』の一人称文体については、先行研究で述べられた説得述としての繰り返しの技法を押さえたうえで、音楽的な効果を生む繰り返しの技法を考察する。次に声の受け手である妻モニクの位相についても光を当てることで、『アレクシス』に特徴的な話者と不在の受け手の関係から生み出されている親密な語りかけの文体の独自性に光を当てた。

本論は結論として以下のことを提示する。ユルスナールの特徴とは、三島由紀夫からの批評にもあったように、まず様々な「声」を創出する能力であった。第一点目は、ユルスナール文学をこの特徴から理解するためには、まずこの「声」がユルスナールに特徴的な様々な思考、つまり「化身」「実体」「現実（レアリテ）」などと密接に結びついており、作者の思想と表現が結合したユルスナール文学の「核」であるということだ。第二点目は、ユルスナールをこの「声」の作家として把握するために、処女出版『キマイラの庭』は重要であるということである。『キマイラの庭』に認められる諸特徴、つまり複数の声を描き出す作品の特徴、死と対峙して得られる親密な声という文体面の特徴、あるいは外部に脱出する者イカロスと閉鎖空間にとどまるダイダロスというテーマ面の特徴は、またユルスナール文学全体と繋がりを持っており『アレクシス』にも継承されている。それゆえユルスナール文学のこの始原まで遡って研究を行うことが重要となるのである。こうしたユルスナールの文学の核には「死」の影が色濃く漂っていることを初期詩を通じて提示し、本論文は終わる。